

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月25日現在

機関番号：32682

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520349

研究課題名（和文） 精神分析と自伝—ジークムント・フロイトとルー・アンドレアス＝ザロメの比較研究

研究課題名（英文） Psychoanalysis and Autobiography. A Comparative Study of Sigmund Freud and Lou Andreas-Salomé

研究代表者

広沢 絵里子（HIROSAWA ERIKO）

明治大学・商学部・教授

研究者番号：20277718

研究成果の概要（和文）：

本研究は、フロイト(1856-1939)と、彼の友人で共同研究者でもあった作家ルー・アンドレアス＝ザロメ(1861-1937)との比較を通じて、精神分析と、文学ジャンルである自伝／伝記との相補的かつ対抗的關係を、フロイトの記憶論とも関連づけながら明らかにし、精神分析が「生の語り方」を変容させる可能性について検討した。フロイトは、伝統的文学観に基づく自伝のあり方（際立った個性を持つ人物の発展的人生物語）に、懐疑的態度を示し、自らの自伝を書くことよりも、自伝に含まれる幼児期記憶の心理学的研究が重要であることを示唆した。これに対し、アンドレアス＝ザロメは精神分析における理論的エッセイ、小説、自伝という多様なジャンルを用いて、自らの幼児期記憶に重層的な表現を与え、個人の記憶を普遍的な共有物へと変貌させている。

研究成果の概要（英文）：

This study examined a complementary or oppositional relationship between psychoanalysis and autobiography/biography as literary genre by comparing the works of Sigmund Freud (1856–1939) and Lou Andreas-Salomé (1861–1937), a writer and his coworker, in the Psychoanalytic Movement. In addition, taking account of Freudian theories of memory, the study investigated whether psychoanalysis enabled both writers to transform a “narrative of life.” Freud was skeptical about the nature of an autobiography, which is traditionally associated with a linearly evolving life story of an outstanding individual. He was less interested in writing his own autobiography, suggesting that the psychological studies of infantile memories included in autobiographical works are much more important. In contrast, Andreas-Salomé used various genres in autobiographical writing, such as psychoanalytic theoretical essays, novels, and autobiographies. She gave her own childhood memories a multilayered representation and transfigured them into a universal memory that should be shared by all.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	100,000	30,000	130,000
年度			
年度			
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：独文学、文学一般、精神分析、自伝、フロイト、ルー・アンドレアス＝ザロメ、アイデンティティ、記憶

## 1. 研究開始当初の背景

ドイツでは「精神分析的文学研究」、「文学心理学」と呼ばれる学問領域が一定の地歩を固めており、30年来の伝統がある。そこでは、精神分析理論を応用した文学・芸術の解釈、芸術家の創造性解明といった研究が進められてきた。このような研究方向に対して、文学・芸術解釈が作者の心理や人格に還元されてしまい、芸術理解を狭めるとの批判があったことも事実である。一方、モデルネの文学的言説と精神分析の言説との間に競合・協力関係を見出し、20世紀初頭ヨーロッパの文化空間を新たに解釈する研究方向も生れてきた（Worbs 1988, Anz 1999, Alt;Anz 2008）。

本研究は、後者の言説分析の系譜において精神分析と文学との関係を捉え、なかでも、精神分析と自伝との関係に注目するものである。フロイトの精神分析理論には、主体は自らの記憶を信じることができず、自らの真実を直接知ることができない、というテーゼが含まれており、自伝作家が持ちうる「自分の人生は自分が一番良く分かっている」という素朴な前提を根底から覆している。従って、「フロイト以降、自伝作家の書法には何らかの変化が生じたのではないのか」という問いが生じるのは自然である。しかし、実際には、この問題を論じた例は国内外の研究を見ても少ない。

自伝はその定義次第で、あらゆる時代のあらゆる種類の文献を含みうる境界画定の難しいジャンルである。他方、精神分析理論も今日までに発展、分岐を経てきている。「精神分析」の「自伝ジャンル」への影響という問題設定は、相応の歴史的、方法論的な限定が必要である。本研究では、精神分析の創始から確立期を中心に、フロイトと、作家でもあり精神分析家でもあったアンドレアス＝ザロメのテキストを考察対象とする。

## 2. 研究の目的

以下の3つの問題領域を相互に関連づけながら、フロイト精神分析が自伝ジャンルに投げかける諸問題の画定を行い、今日的な「生」の表象方法とその理解に有用な観点を掘り起こしてゆくことを目的とした。

### (1)フロイトにおける反自伝・反伝記的要素

B. Mazlish が1970年に既に指摘したように、精神分析家は必ずしも自伝の執筆にあたって革新的な書法を編み出したわけではない。フロイトの自伝的テキスト『<自己を語る>』も同様である。本研究では、フロイト

の場合、むしろその理論の中に、規範的な自伝論の諸要素を覆す契機が見られることを明らかにしようとした。ディルタイやG.ミッシュが構築した哲学的自伝論が前提としていた「個性的な個人」、「発展する統一的な生」、「主体が取捨選択する記憶」に対して、フロイトの「普遍的な成長段階（没個性的）」、「時間軸の無い無意識的生」、「抑圧された記憶の、主体に対する優位性」が対置できるだろう。(2)アンドレアス＝ザロメの自伝『人生回顧』

1930年代に執筆されたアンドレアス＝ザロメの自伝『人生回顧』は、読者に不可解な印象を与える難解な構築物であり、従来の受容史において正当な評価を受けてきたとは言えない。しかしながら、彼女の精神分析における著作とともにこの自伝を分析することで、精神分析的な自伝書法の一つのあり方が見えてくると考えた。『人生回顧』における精神分析的視角による「生」の描写の実験性とその限界を明らかにする必要がある。

### (3)両者の比較から見える精神分析と自伝／伝記との関係：記憶とアイデンティティ

フロイトとアンドレアス＝ザロメの比較を通じて、精神分析が「生の語り方」をどのように変容させる可能性があるかを考察する。一つには、フロイトにとって幼児期の記憶は実証性がなく、その人の存在証明としてはきわめてあいまいな性格を与えられている。フロイトにおける幼児期記憶の虚構性は、人類の起源の虚構性を証明することに連なる。また、もう一つには、アンドレアス＝ザロメの叙述に基づけば、自伝は彼女個人の生を誇示するのではなく、個人の生を他者の生との連関に位置づける方向性を示している。記憶は個人のアイデンティティを支えるというよりは、普遍的な生への手がかりとして位置づけられており、個人の生を、生の連帯へと開く。

## 3. 研究の方法

### (1)基本的文献の収集

本研究の中心には厳密なテキスト分析がある。国内外の研究機関・データベースを利用し、関連文献の収集にあたった。フロイトの著作は補完すべき主要文献を集めた。アンドレアス＝ザロメの著作については、図書として刊行されたものだけでなく、雑誌等に発表され、今日では入手しにくくなっている文献の複写も含めて、主要文献の収集がほぼ終わっていたため、その補強に努めた。精神分析と自伝／伝記の関係を論じた文献のほか、

本研究の理論的枠組みの形成、方法論の確立のため、精神分析と文学との境界領域に関連した研究書、本研究のテーマと密接な関係を持つと思われる精神分析家および作家たちの自伝的テキスト、自伝研究・伝記研究分野における歴史的文献、幼児期記憶や自伝的記憶に関する心理学・社会学・哲学分野における文献などの収集を行った。

#### (2) ドイツにおける資料収集と調査

アンドレアス＝ザロメについては、作家としての活動については比較的広く知られていたが、精神分析家としての詳しい経歴、活動状況についてはようやく近年の研究の進展によって明らかになってきた。彼女の活動拠点となったヨーロッパの各都市（ベルリン、ゲッティンゲン、ウィーン）のうち、「ベルリン精神分析研究所（カール・アブラハム研究所）」での調査活動を行い、そこでアーカイブの利用だけでなく、精神分析運動史の研究者との交流・情報交換に努めた。

#### (3) 学会発表

日本独文学会、ドイツ語学文学国際学会（IVG）での発表を通じて、他の研究者たちからのフィードバックを得ながら研究を進めた。

### 4. 研究成果

(1) 「フロイトにおける反自伝・反伝記的要素」という問題領域については、フロイトの人生史モデルは規範的な人生史に対立し、これを解体するベクトルを示していることが確認できたが、彼の自伝・伝記ジャンルに対する懐疑が、とりわけ歴史記述の前提を突き崩す論理構成に表明されていることが分かってきた。

(2) 自伝論、および、近年の精神分析と文学との関係を論じた研究書等を中心に文献収集を行い、最新の研究動向を把握した。

(3) ドイツの精神分析関連研究施設において調査を行った。「ベルリン精神分析研究所（カール・アブラハム研究所）」では、心理学や精神分析の研究者との交流を得た。

(4) 日本独文学会でのシンポジウム「Auto-/Biographie. Erzähltes Selbst, erinnerte Bilder (自伝/伝記 語られた自己、想起されたイメージ)」において、「Ein Gegenkonzept zur literarischen Autobiographie? Freuds Auseinandersetzung mit Kindheitserinnerungen (反自伝的コンセプト？フロイトの幼児期記憶論について)」という題で学会発表を行った。フロイトの反自伝的契機について、彼のレオナルド・ダ・ヴィンチ論とゲーテ論における幼児期記憶概念を手がかりに考察した。

(5) 2009年5月に行われた日本独文学会でのシンポジウムをもとに、ドイツ語による叢書を刊行した。

(6) ワルシャワで開催されたドイツ語学文学国際学会において、フロイト、C.G.ユング、アンドレアス＝ザロメの自伝的テキストを比較しながら、自伝とフィクションとの関係について発表した。三者の自伝書法には、それぞれの心理学理論・精神分析理論における心的世界と現実との関係が反映していた。記憶の虚構性を暴く立場から（フロイト）、記憶の実在性を優位とする立場（ユング、アンドレアス＝ザロメ）までを明らかにしようと試みた。

(7) アンドレアス＝ザロメのいわゆる「フロイト日記」を検討することで、両者の人間的な関係にも光をあてた。「動物」をめぐる両者の対話は、ナルシズム論に関する互いの議論に関係している。

(8) 2010年の国際学会での発表をもとに執筆した論文「Primat der Erinnerungen - Marginalisierung des Autors」では、セルジュ・ドゥブロフスキーが1970年代に提唱した「オート・フィクション (Autofiction: autobiography と fiction からなる造語)」という概念の検証を出発点として、「想起する主体」と「思い出」との関係を、精神分析第一世代の自伝的書き物を事例として歴史的に考察した。ドゥブロフスキーによれば、フロイトのいう「隠蔽記憶 (遮蔽想起)」が示すように、主体は自分の真の思い出 (人生) を描くことができず、したがってその自伝は虚構との境目を失うのであるが、フロイトは自らの伝統的自伝概念にそのような観点をもち込むことはせず、文学的自伝ジャンルと無意識の研究とを区別していた。他方、ユング、アンドレアス＝ザロメの自伝においては、それぞれ異なる程度ではあるが、想起をきっかけに個人的生よりも全体的生への通路が開かれることに重点が置かれ、著者の生を越えた想起そのものの実在性が強調されることになる。

(9) 1912年以降、フロイトとアンドレアス＝ザロメに間に交わされた精神分析に関する議論のうち、ナルシズムは重要な論点の一つだった。フロイトはナルシズムを倒錯においてのみならず、人間の正常な発達段階 (リビド一段階) に位置づけた。アンドレアス＝ザロメは、フロイトがあまり掘り下げなかった幼児期ナルシズムの問題を、論文「二重方向としてのナルシズム」(1921年)や、小説『神なき時間』(1922年)に結実させている。1930年代に執筆された自伝『人生回顧』を含めると、幼児期の「鏡像体験」の記憶が、理論的エッセイ、小説 (フィクション)、自伝という異なる書き物のジャンルを横断して扱われていることが分かる。アンドレアス＝ザロメが自分のナルシズム論を、特に想起と文学との密接な関係において展開していることに着目し、「水鏡に映るナル

シス — ルー・アンドレアス=ザロメの『二重方向としてのナルシズム』における自伝と記憶」を執筆している（2012年内に発表予定）。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

1. 広沢絵里子「フロイトとルー・アンドレアス=ザロメ — 「動物」をめぐる覚書」『フロイト全集月報19』『フロイト全集第20巻』岩波書店、2011年1月、pp. 1-5。査読無。

2. 広沢絵里子「インゲ・シュテファン氏特別講義『メデア—多文化間交流における神話的偶像について』『いすみあ』明治大学教養デザイン研究科紀要 3号、2011年3月31日、pp. 143-146。査読無。

3. Eriko Hirosawa: Primat der Erinnerungen — Marginalisierung des Autors. Zum Verhältnis zwischen Psychoanalyse und Autobiographie im Hinblick auf das Konzept ‚Autofiktion‘. In: Akten des XII. Internationalen Germanistenkongresses Warschau 2010. «Vielheit und Einheit der Germanistik weltweit» Bd. 8 (Sektion 60: Autofiktion. Neue Verfahren literarischer Selbstdarstellung) 2012, pp. 199-203. (初校済、印刷中。発行年は予定) 査読無。

〔学会発表〕（計2件）

1. Eriko Hirosawa: Ein Gegenkonzept zur literarischen Autobiographie? Freuds Auseinandersetzung mit Kindheitserinnerungen. 日本独文学会 2009年春季研究発表会（明治大学駿河台キャンパス）、2009年5月30日。（ドイツ語発表）

2. Eriko Hirosawa: Primat der Erinnerungen — Marginalisierung des Autors. Zum Verhältnis zwischen Psychoanalyse und Autobiographie im Hinblick auf das Konzept ‚Autofiktion‘. 第12回ドイツ語学文学国際学会（IVG）ワルシャワ大会（ポーランド、ワルシャワ大学）2010年8月2日。（ドイツ語発表）

〔図書〕（計1件）

1. Eriko Hirosawa, Michael Mandelartz 他3名（共編著）：Auto-/Biographie: Erzähltes Selbst, erinnerte Bilder. 日本独文学会（日本独文学会研究叢書69号）2010年5月。  
〔ドイツ語〕

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

広沢 絵里子 (HIROSAWA ERIKO)  
明治大学・商学部・教授  
研究者番号：20277718

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：